

〔注意〕 答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。
本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は絵のリアリズムをこう説明する。

絵では力のはいった手を、実際よりはるかに大きく強くかく。田島征三たしませいざうくんの力太郎ちからたろうなどは、グローブのような手をかく。これが力太郎の力を、強く表現する。写真のもつリアリズムと、絵のそれとのちがいだ。

浮世絵うきよゑのえがく女性の手足は、小さくかく。歌舞伎かぶぎの女形おんながたは、指の先しかみせないようにする。これが女のやさしさの表現なのである。これを理屈りくつでみたり、科学的にみたりしたら、成り立たない。ウソの表現なのだ。① ウソの表現だから、より女性的にみえる。

歌舞伎の女形がより女性的にみえるというのは、女性の行動のなかにも、男性的なものがふくまれている、そうしたものを消して、女性的なエクスだけでみせるのが女形で、より女性的に思えるわけである。これがウソのおもしろさだ。玉三郎たまざうらうが男であることを知りながら、そのウソの女を高い金をはらって、ウソを楽しみにゆくのである。まことに非科学的な話である。日常みているテレビドラマも、あれも役者がやっているのである。理屈をいえば、金をもらってウソをやっているんだから、いっしょになって泣いたり怒おどったりするのは、ばからしいことだといえると思う。ところが、だれもふしぎがらず、楽しくだまされている。

このごろ科学絵本がさかんないか、物語絵本まで科学的にみたがるお母さんがいる。

私の「かさじぞう」で、前のページで吹雪ふぶきで、次のページでは雪がゆるやかになり、お爺さんおじいが地藏かきさんに笠をかぶらせているのは、おかしいではないか、とクレームをつけたお母さんがいた。

吹雪がそんなにすぐやむはずがない。もっとズーッとふぶいていいはずだといいたいのであろう。

この問題を画家の立場からいわせてもらうと、はげしい吹雪のところを地藏さんを背景に、お爺さんがからだを斜ななめに歩いていて。次のページの場面は、お爺さんに笠をかぶせてしまったなごやかな場面である。当然前のページと次のページとは、内容のちがいや場面転換てんかんという意味からいうても、これは② 表現として当然の処理である。また、これを象的に見ても、山の天気は瞬時しゅんじに変わることもあって、③ 問題にならない話だが、いわないだけで、案外そう思っている向きも少なくないのではないかと思う。

競馬好きのある人が、絵で馬の走っているのを正確にかいたのを、みたことはない——というた。馬の走っている瞬間は、写真でみるしかないが、それをみたことがあるのであろうか。それは足を一本引きずったような、へんな形になるのである。これでは絵にならない。

このことは、昔からある武者絵をみると、鹿しかのように足をそろえて飛ぶように走っている。これはウソであるが、真実馬が走っているようにみえる。事実をかいたら走っているようには、みえない。

④ 私も『スーホの白い馬』でそのことにつづかったが、結局競馬で疾走しつそうしている場面の馬は、昔の表現によった。これが事実と真実の差であり、絵画的表現なのである。

一番わかりやすいのが、山藤章二やまふじしやうじさんの似顔絵マンガであろう。写真や実物とくらべるとちがうが、やっぱりよく似ている。その人の特長をひどく誇張こちやうするので、事実からははなれるが、はなれることによって、そのもっている核心かくしんをつき表現するから似るのである。

(赤羽あかば 末吉すえきち『私の絵本ろん』による)

〈注〉 リアリズム……現実をそれらしく表現しようとするやり方。

田島征三……絵本作家。絵本『ちからたろう』で絵を担当している。

浮世絵……………江戸時代に日常生活や人物、風景などを描いた絵や版画。

女形……………歌舞伎では女の役も男がつとめるが、その役者のこと。

エキス……………最も本質的な部分。

玉三郎……………坂東玉三郎。女形の歌舞伎役者。

武者絵……………武士の姿や戦いの様子を描いた絵。

山藤章二……………漫画家、イラストレーター。

問一 ———— ①「ウソの表現だから、より女性的にみえる」とはどういうことですか。

問二 ———— ②「表現として当然の処理」とありますが、

(1)二つのページをくらべて、表現の仕方が違う点を、後にあげた絵①・②も参考にして説明しなさい。

(2)「物語絵本」の場合、なぜ「表現として当然の処理」と言えるのか、説明しなさい。

問三 ———— ③「問題にならない」とは、ここではどういうことですか。次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実際の気象の変化からみても説明できる

イ 作者は物語の天気を自由に換えられる

ウ 科学的に絵本をかくべき理由は特にならない

エ 読者にとって小さな問題は気にならない

オ 天候の急変をここではうまく使っている

カ なごやかな場面も話の中に入れるべきだ

問四 ———— ④「事実と真実の差」について、馬を例に用いて説明すると、どのようになりますか。描かれる馬の姿とその特徴について、両者の「差」が分かるように、また後にあげた絵③も参考にして説明しなさい。

問五 次のア～オについて、本文の内容と合っているものには○、合っていないものには×を書きなさい。

ア 力太郎の手は、実際の手の大きさそのままに力強くかかっている。

イ 女形は男がつとめるため、どうしても女性らしさを欠く所がある。

ウ 物語絵本では、場面によって表現が大きく変わることもありうる。

エ 走る馬を上手にかくためには、きちんと写真をみる必要がある。

オ 似顔絵は、実物からはなればはなれるほど似せることができる。

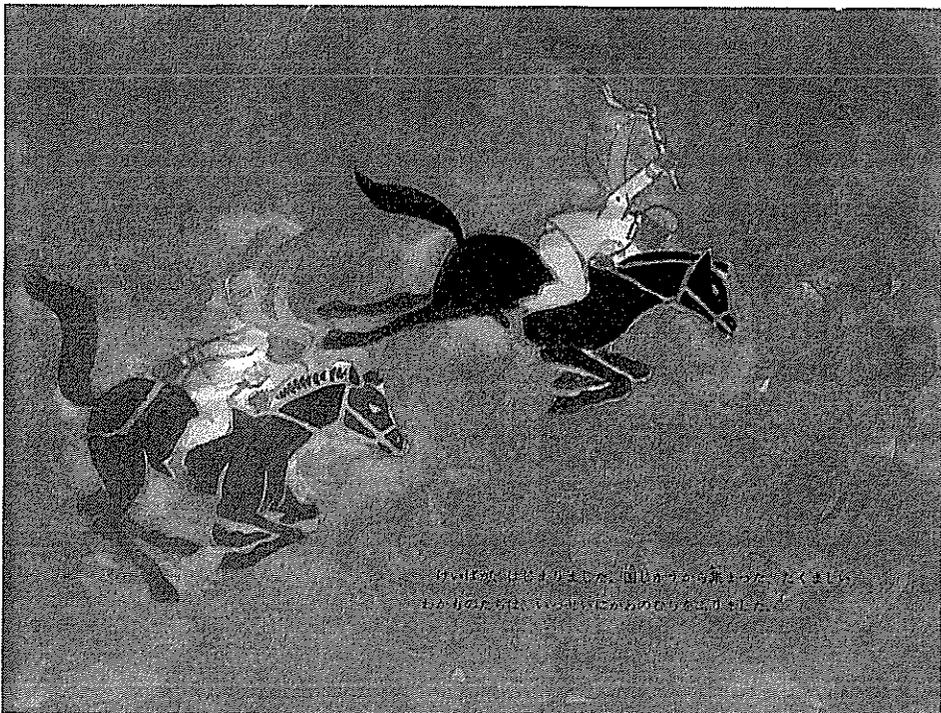
㊦『かさじぞう』より、吹雪のページ



㊧『かさじぞう』より、笠をかぶせているページ



㊨『スーホの白い馬』より、馬が疾走している場面の一部



二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

さむらいは大きく手をうって女中をよぶと、店さきではじめていた自分の食事も、三五郎さんごろうのへやにはこぼせた。「こうしてところをかえてかたりあうも、よかでごわすの、ハハハハ。」

① さむらいは、女中がへやにくるたびに、まるでふるい友だちかなにかのようにふるまった。女中がでていくと、ふたりはながいあいだおしまつてむかいあった。さむらいはしきりと酒をのみつつける。

三五郎はたまらなくなって、口をきった。

「いつでございますか。」

「いつって?」

「おわかりでしょうに……。そのためにわたしをつけてこられたのでしょうに。」

「ああ、そのことでごわすか。」

さむらいはさういうと、ちょっと口くちにえみをうかべた。

「わらってくださいるな。ごらんのように、わたしは一本の刀もっておりません。いつだってすきなときにきれるでしょうに、不意打ちなさらずとも……。わたしだって身分はいやしい職人でございますが、すこしは人のうえにもたってきたものです。② みっともないさまを、ひと目にさらしたくはございません。」

「不意打ちなどせんすばい。」

さむらいはさういうと、とっくりの酒をまたどくどくと茶わんにうつして、いっきにのみほし、フーッとひとつ大きくいきをはいた。

「不意打ちをするなら、あの川内川せんだがわのかわらか、とうげの道でやっとるです。いやもっとまえに……。」

「山やまごえの道も、ずっとつけてこられたのか。」

「そうでごわすとも。それがおいどんの商売でごわすもの……。じゃが、きれなかった。おいどんにはきれなかった。三五郎はじっとさむらいの顔をみつめていた。さむらいは、おもわず目をそらして、ごまかすように、また茶わんの酒をのみほした。そして、からになった茶わんをみつめながら話しつつづけた。

—— 三五郎は街道かいどうをそれて、川に沿って歩き始めると、さむらいは、③ まくつもりだな」とおもって、あわてて自分も川にそって三五郎のあとを追ったのだった。

川にはユタかなミズがあった。ひと目もない。きるにはもってこいの場所だった。

さむらいはようすをうかがった。すると三五郎は、ふとたちどまって、かわらにおりていった。しばらくじっとたまま、かわらを見つめていたが、そのうちその場にしゃがみこんでしまった。

(どうしたのだろう。なにをみつけたのだろう。)

さむらいは、からだをのりだして、三五郎のようすをうかがった。

石工いしくがよい石をさがすときには、まずかわらの石をさがすのである。よい石ころがある川上には、かならずよい石場がある。

三五郎は、川をみると、どうしても石ころをしらべてみないではいられなかったのだ。

三五郎は、たしかに、あとをつけてくるあやしげなきむらいをまくために、街道をそれたのであったが、かわらに美しいみどりがかつた黒石をみつけたとき、それをしらすべすにとおりすごすことはできなかったのだ。

それを見たさむらいは、三五郎さんごろうが自分からにげるためでなく、石をしらべるためだったのかとおもうと、^④ふと殺意をそがれてしまった。それからあとをつけると、三五郎はまたしてもかわらにおりて、石をしらべしらべ、もうまるで追われるものようではない——。

「わしは、永送り専門の、いやしいさむらいでござす。なん人の人をきりころしてきたか、かぞえることなどできもさん。おはんじゃ、とてもわかりもさんとおもうが、あとをつけて、あいてがまったくわしに追われていることに気がつかないうちは、なかなかきれいなものでござす。しおどき、ちゅうもんがござしての、あいてが、追われていることに気がついて、にげかくれしはじめると、やっとその気になるもんでござす。」

「では、わたしたちのなかまも、あなたが……？」

「おゆるしくだされ。殿とよさまじきじきの命令でござす。おいどんが役目にごわす。」

三五郎は「あー」と、ひとつふかいためいきをついた。

(やっばりそうだったのか。)

そうおもうと、とても自分ひとりだけがたすかって、郷里に帰るわけにはいかないとおもう。

「わたしもきってください。」

「いや、きらん。わしにはきれん。^⑤岩永三五郎どのをきるわけにやまいませぬわ。おはんは、わしにはようわからんが、えらいおかたにちがいない。おはんは、わしに、いのちごいをしなさん。わしはいのちごいをするやつば、きりすてる……。」

三五郎の頭に、新八、利一、万平、源助……など、なかまの石工たちのすがたがうかんた。みな石をきざむことのほかには、なにもしない善良な石工たちである。きられるときに、どんなすがたでこの人きりざむらいにいのちごいをしたであろうか。三五郎ははげしいかりをこめた目で、じっとさむらいをにらんだ。(今西 祐行『肥後の石工』による)

〈注〉 女中……ここでは店で働く女性のこと。

永送り……切り捨てて殺すこと。

殿さまじきじきの命令……肥後へ現在の熊本県くまもとの石工・岩永三五郎とその仲間たちは、薩摩さつまへ現在の鹿児島県かごしま西部へ藩はんで石橋を築いた。しかし、その橋には特殊な仕掛けしかけが施ほどこされており、薩摩藩はその秘密を守るために、かかわった石工たちをひそかに殺していた。

問一 —— ①「さむらいは、女中がへやくるたびに、まるでふるい友だちかなにかのようにふるまった」とありますが、それはなぜですか。

問二 —— ②「みっともないさま」とは、どのようなすがたのことですか。

問三 —— ③「まくつもりだな」とありますが、「まく」とはどういう意味ですか。次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 石をさがす イ いのちごいをする ウ 急ぎ足でにげる エ 見うしなわせる
オ 返りうちにする カ 横道にそれる

問四 —— ④「ふと殺意をそがれてしまった」のはなぜですか。

問五 —— ⑤「岩永三五郎どのをきるわけにやまいませぬわ」とありますが、「さむらい」の「三五郎」への思いはどのように変わってきたか、本文全体から説明しなさい。

問六 ～～～～「川にはユタかなミズがあった。」を、カタカナは漢字に直し、ていねいに大きく一行で書きなさい。

平25	中
国	6
	6

三 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

居直りりんご

石原 吉郎

ひとつだけあとへ

とりのこされ

りんごは ちいさく

居直ってみた

りんごが一個で

居直っても

どうなるものかと

かんがえたが

それほどりんごは

気がよわくて

それほどこころ細かったから

やっぱり居直ることにして

あたりをぐるっと

見まわしてから

たたみのへりまで

ころげ行って

これでもかとちいさく

居直ってやった

問一 「りんごは ちいさく／居直ってみた」とありますが、この時の「りんご」の気持ちを説明しなさい。

問二 「それほど」が二回くり返されていますが、その効果を説明しなさい。

問三 「これでもかとちいさく／居直ってやった」とありますが、そのようにした「りんご」の気持ちを想像して説明しなさい。

受験生の皆さんへ

国語日の本文に誤りがありましたので、問二(1)(2)は全員を正解とし、得点を与えます。

誤 「次のページの場面は、お爺さんに笠をかぶせてしまったなごやかな場面である。」

正 「次のページの場面は、お地藏さんに笠をかぶせてしまったなごやかな場面である。」